CONTENTS 2010 NO.31 GOLD & PLATINUM

協会設立30周年記念号

ご挨拶 3 社団法人 日本金地金流通協会　会長 古宮 隆充

祝辞 4 経済産業省資源エネルギー庁鉱物資源課　課長 安永 裕幸

巻頭特集：座談会 5 **最近の貴金属地金業界を語る**
古宮 隆充・乾 保太郎・山口 純・岡本 英彌・片桐 俊一

特別寄稿 10 草食系金投資のススメ　豊島 逸夫

特別寄稿 12 世界的な取り組みでプラチナの意味を問う　ハンキンソン 尚子

南ア訪問記 14 知識と見聞を広め、相互交流を深めた9日間　亀井 幸一郎

社団法人 日本金地金流通協会 18 協会設立30周年記念イベントのご案内

金ちょっと面白い話 19 秘伝!?　金山発見法

2010年貴金属市場の動向と今後の展望 20 通貨不安が押し上げる金価格　志田 富雄

ゴールド & プラチナ サロン 22 イーデス・ハンソンさんに聞く―バックボーンは、幼い頃育ったインド

金と世界史 24 美女と黄金―喜びと哀しみを織りなす

貴金属情報 27 インターネット・サイトのご紹介

ゴールド・データ 28 2009年の年間平均金価格は…

ゴールド・リポート 30 金価格の歴史的大転換点を再考察

プラチナ・データ 34 2009年の年間平均価格は…

プラチナ・リポート 36 ブライダルジュエリー市場の現状

社団法人 日本金地金流通協会 40 沿革と活動から　協会役員の紹介

正会員・特別会員紹介

登録店紹介

賛助会員紹介

表紙解説

金製アクセサリー（洛陽博物館所蔵）『誕生！中国文明』展出品作より

1990年に洛陽市邙山宋墓から出土／北宋時代・11～12世紀／金・貴石／縦6.5cm 横6.5cm 厚0.3cm 重22.4g

金の細い線を巧みに絡み合わせて全体の紋様を形作り、枠の部分には微小な金の粒を溶接するという高度な技術が見られる。中心の雨粒形とその四方の小円形には、トルコ石などの貴石が嵌めこまれ華やかさを演出している。北宋時代の貴族の墓から発見されたもので、当時の貴婦人たちが身に着けたアクセサリーの1つであろう。

『誕生！中国文明』展

紀元前2000年頃、中国最初の王朝がおかれた夏（か）の時代から北宋が滅亡した1100年頃まで、河南省は中国の政治、経済、文化の中心地として栄えた。この河南省で出土した数々の名品に焦点をあてた中国文明の誕生と発展の跡を紹介する興味深い展覧会。

●東京展 2010年7月6日（火）～9月5日（日）東京国立博物館（東京都）
●九州展 2010年10月5日（火）～11月28日（日）九州国立博物館（福岡県太宰府市）
●奈良展 2011年4月5日（火）～5月29日（日）奈良国立博物館（奈良市）

ご挨拶

社団法人 日本金地金流通協会 設立30周年を迎えて

社団法人 日本金地金流通協会
会長　古宮 隆充

1980年に設立された日本金地金流通協会は、本年30周年を迎えました。これもひとえに正会員、特別会員、登録店および賛助会員の皆様方のご支援とご協力によるものと深く感謝申し上げます。

当協会は、1978年の金の完全自由化後に無秩序に出現した私設の金市場による一般消費者の被害が多発したことから、金地金の健全な流通機構の整備と正しい知識の普及を図り、一般のお客様がいつでもどこでも安心して貴金属地金を取引できる環境を整備することを目的に設立されました。当協会ではその目的を達成するために、これまで次のような活動に取り組んでまいりました。

①機関誌「GOLD & PLATINUM」の発行
②Webサイトによる貴金属情報の提供
③新聞・雑誌広告による当協会および加盟各社の周知
④研修会の開催
⑤マネーロンダリング対策関係法施行に伴う普及・啓蒙活動

また、本年は30周年記念事業として次のイベントを実施いたします。

①南アフリカ視察研修（3月）
②金貨プレゼントキャンペーン（10～11月）
③記念セミナー（10月）

2008年のリーマンショック以降、世界的な金融不安を背景に、安全資産としての金にかつてないほどの注目が集まりました。投資家のリスク回避の動きが活発化し、安全資産として、また通貨の代替投資先として金に資金が流入しました。その結果、貴金属相場はドル建てのみならず欧州各国の通貨建てでも最高値を更新し、国内小売価格も今年5月には27年ぶりの高値となりました。価格高騰がテレビや新聞で伝えられると、手持ちの貴金属製品を換金するために初めて店頭に来られるお客様が急増し、各店舗では順番待ちの長い列ができました。過去にも何度か金ブームと呼ばれる時期はありましたが、今回ほど、たとえば主婦や若者といった、投資家以外の広い層にまで貴金属が認知されたことはなかったのではないでしょうか。貴金属取引の今後の広がりに大いに期待が持てる状況であるといえます。

しかし、その一方で、全国各地でにわかに増えた貴金属買取業者の存在が懸念されます。その業者の多くは適切な品位鑑定を行わず、業界の基準価格と比べてはるかに安い価格で買取りを行っているという話も聞いております。このような買取り方法に問題があると思われる事例が広がれば、当協会がこの30年間に築いてきた貴金属取引の信頼性に影響を与えかねません。特に金は安全資産としての買いが入りやすく、金ETFの残高も増加傾向にあることから、再び最高値を更新する展開が予想されます。貴金属や取引形態についての知識が少ない初心者のお客様が今後ますます増えることを考えますと、貴金属買取業者の問題だけでなく、貴金属を悪用した新たなトラブルなどが発生することも十分に考えられます。

当協会としましては、正会員、特別会員、登録店、賛助会員の間で意見交換や情報交換をさらに活発に行い、不正行為の監視を強化していく必要があると考えます。そして、引き続き公正な価格で安心して貴金属地金を取引していただける環境をお客様に提供していくことが、貴金属製品のリサイクルシステムの確立、ひいては資源の乏しいわが国にとっての貴金属の安定供給の確保につながるものと期待しております。

加盟各社におかれましてはどうぞ当協会の活動をご理解いただき、さらなるご支援をたまわりますようお願い申し上げます。

祝辞

(社)日本金地金流通協会 設立30周年に寄せて

経済産業省資源エネルギー庁
鉱物資源課長　安永 裕幸

社団法人日本金地金流通協会が設立30周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

この30年間、我が国経済は、高度経済成長、経済摩擦や円高不況、バブル経済の崩壊、そして、リーマンショックに端を発した世界的な金融危機など、いくつもの大きな変化を経験してきましたが、貴協会は、金や貴金属地金の正しい知識の普及や健全な取引を推進され、重要な役割を果たしてこられました。

貴協会が設立された頃を振り返りますと、金取引の自由化により取引が非常に活発化し、アフガニスタン情勢の緊迫化等を背景とした金相場の大暴騰・大暴落も相まって投資商品として関心が集まり、金ブームの様相を呈していたかと思います。しかしその一方で、私設先物市場や、現物紛い商法による一般消費者の被害が社会問題化するなど、様々な困難を抱えた時代でもありました。こうした時代の中で、我が国の健全な金・貴金属流通を推進する中心的な役割を果たす機関が必要となり、日本金地金流通協会が設立されました。設立後、この「GOLD & PLATINUM」の出版等による広報活動、各種講演会や研修会の開催による普及・啓発事業を実施され、今日に至るまで継続されていることは、非常に大きな功績であると思います。

現在、我が国経済を取り巻く情勢は大きく変化しており、金をはじめとする多くの資源価格の高騰、新興国や資源国の台頭による世界経済の多極化、環境問題などが進んでおり、我が国経済は、このような環境変化に対応し得る経済産業構造に変革していくことが求められています。

このような中で、最近の金・貴金属を取り巻く情勢は、中国やインドを中心とする新興国における消費の拡大、通貨や各種コモディティに対する不安から「安全資産」を求める投機資金の流入、触媒等の工業需要における省使用化技術の進歩など、これまでに例を見ないほど大きく変化しており、予測困難な局面が存在しております。さらには、取引の現場において、悪質な業者が詐欺行為を行う等のケースも依然として散見されます。

今後、我が国が金・貴金属の安定供給を確保し、健全な流通を維持していくためには、技術力の強化を通じた海外権益の確保、貴重な国内資源と位置付けられる鉱物資源のリサイクルの推進、官民を挙げた戦略的な資源外交の推進、正しい知識の普及・啓蒙活動などが極めて重要であり、経済産業省といたしましても、諸施策を着実かつ強力に推進するとともに、警察庁等の関係省庁とも連携して不適切な取引の撲滅に努めてまいります。

貴協会におかれましては、今後とも金・貴金属の流通を担う業界として中心的な役割を果たしていただき、一般消費者が安心して金・貴金属の取引ができる環境づくりに貢献されることを期待しています。また、マネー・ロンダリング対策につきましても、従来から他業界に先んじた積極的かつ迅速な取組を行われておりますが、引き続きご協力をお願いいたします。

末筆ながら、日本金地金流通協会を築き、継承してこられた多くの関係各位のご努力、ご尽力にあらためて敬意を表しますとともに、日本金地金流通協会並びに会員の皆様が益々のご発展を遂げられますことを心よりお祈り申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

前列左から乾保太郎副会長、古宮隆充会長、山口純副会長　後列左から片桐俊一広報委員長、岡本英彌理事

協会設立30周年記念 巻頭特集：座談会

「最近の貴金属地金業界を語る」

業界が活性化している今だからこそ、協会設立当初の精神を大切にし、金地金の健全な取引と正しい知識の普及に努めなくてはならない。

社団法人日本金地金流通協会が設立されて本年は、
30周年を迎えることになりました。
今号では、2006年からの5年間の業界動向を中心に、
マネーロンダリング対策の法律の施行、
金ETFの東京証券取引所への上場、
京都で開催されたLBMA／LPPM国際会議に協賛、
金・プラチナの価格は、それぞれドル建てで
史上最高を記録などについて、
さらに今後の協会活動の展望なども交えて
語っていただきました。

出席者

古宮 隆充
当協会会長　石福金属興業株式会社　代表取締役社長

乾 保太郎
当協会副会長　乾庄貴金属化工株式会社　代表取締役社長

山口 純
当協会副会長　株式会社徳力本店　代表取締役社長

岡本 英彌
当協会理事　田中貴金属工業株式会社　代表取締役社長

片桐 俊一（司会）
当協会広報委員長　片桐貴金属工業株式会社　代表取締役社長

片桐　本日は、本誌の巻頭特集の座談会にお集まりくださいましてありがとうございます。今年は協会設立30周年ということになります。ご出席の皆様は、協会の古宮会長、乾副会長、山口副会長、今年5月まで会長を務めていただきました岡本理事の4名です。司会進行は、私がさせていただきます。古宮会長は今年の5月に、今日ご出席の岡本前会長から引継がれました。30周年を迎えた節目に会長になられたことで、今後の取り組みなど抱負をお聞かせいただけませんか。

協会設立当初の精神を大切に受け継いでいかなくてはならない

古宮　30年と言う歴史の中で様々なことがあったと思います。その中でも我々の協会の設立趣旨でもあります「金地金の健全な流通機構の整備と正しい知識の普及」を図ることによって、一般消費者がいつでもどこでも安心して貴金属地金を取引できる環境の整備に努めてまいりました。

今日、金への注目が高まっています。それは、サブプライムローン問題を発端とする世界的な金融危機という流れの中で、安全資産としての金が見直されてきているからです。国内でも近頃では主婦や若者までが個人デイトレーダーとして、株式の運用を積極的に行っているそうです。

その中のポートフォリオの1つとして、金が取り上げられるようになっているという話も聞いておりますので、金の役割は、今まで以上に大きくなっていると感じております。そのような環境の中で我々は協会設立当初からの精神をしっかりと受け継ぎ、一般消費者に対して金の正しい知識の普及に努めていかなくてはいけないと考えています。

古宮会長

片桐　この5年間、金が注目を浴びることが多くなってきたと思います。協会設立以来、今日まで理事として副会長としてご尽力いただいている乾さんから、協会設立30年の歴史を含めてお話をいただきたいのですが。

乾　25周年の時の座談会にも出席いたしましたが、この5年間はめまぐるしい変化があったと思います。しかし、30年前の協会設立ということが、一番の大きなことだと思います。当時、日本で金の輸出入が自由化され、国内では金の取引が完全に自由になりました。これに伴い、金に関する悪徳商法などが現われ、一般消費者の被害も続出し、色々と社会的な問題が出てきました。このような理由から当時の通商産業省（現経済産業省）の要請で、従来からの貴金属地金協会を発展的に解消して、1980年に発足したのが現在の協会です。金の健全な取引と正しい知識の啓蒙活動が主旨でありました。金の取引に一般の方々も参入できる場になりましたから、初代会長の田中淳一郎さんはことある度に協会の設立主旨を強調され、健全な役割を果たそう、啓蒙しようではないかと言っておられました。

片桐　この度、副会長に就任されました山口さんは、この業界に入られたのは2007年とお聞きしております。フレッシュな感覚から、この業界をどのように見て感じておられますか。

山口　私は2006年まで某事務機メーカーに勤めておりました。メーカーで製品を作るということは、世界で一番になるということです。それは、言い換えれば他社に打ち勝つということです。そのためには、少しでも付加価値の高い良い製品を作り出すということなのです。それに対して金の業界は、扱っているものが特殊なもので、それが協会の正会員がつくったものであり、金でフォーナイン（99.99%）と言ってしまえば、まあ、どれも同等に扱えます。その点が一般の製品とは全く違い、製品差が無いのですから。そうゆうものだからこそ、各社協力しあって健全に流通させるのが一番大事だったんですね。これだけライバル企業同士が協力してやっている世界というのは本当に新鮮に感じました。以前勤務していたメーカーとは異なり、シェア拡大というのではなく、全体のパイの拡大というのが業界の目標なのだなーと感じているところです。

片桐　大変フレッシュなお話をありがとうございました。続きまして、今年の5月まで会長を務められました岡本さんより、この5年間を振り返って、また協会の30年を振り返って、お話いただきたいのですが。

岡本　25周年の座談会でもお話をいたしましたが、私自身入社が1987年でした。それから2001年までの10数年間は、金投資の時代は終わったのではないかといわれ、店頭には殆どお客様が来られない、マスコミは全く注目しない、相場はずーっと低いままで、鉱山会社の経営はどうなってしまうのか…。プラチナ価格は300ドル台まで落ち、金価格よりも下がってしまった。金も低かったのですが、プラチナはもっと安くなった。全国の特約店様も殆ど売上げがなく、特約店を返上したいという声だとか、当然、賑わいませんから色々な

イベントを企画しても殆ど関心がない……そんな時代でした。2001年アメリカで9・11同時多発テロが起こり、その後、現物資産が注目されて、世界中で、ぐーっと金、プラチナに注目が集まってきました。これが2005年頃だったですね。そこから先の注目度の高まり方というものは、想像を絶するものがあります。特に中東での戦争ですとか、もともと金に対する信頼が強かったBRIC's の国々の経済発展に注目が集まってきました。先週も中国に行っていたのですが、テレビでは毎朝、金価格が報じられています。中国における金、プラチナの投資用需要、これはもの凄いことになってきています。最近は金も1,000ドルをはるかに超え、プラチナも1,500ドルとなりました。本当に2000年頃には想像もつかなかった状況になっています。このような状況で我々業界に対する信頼と期待が大きいだけに、以前の豊田商事のような問題が起きると大変な社会問題となり信頼失墜となると思います。そのような責任と期待という格段の差を感じているところです。

マネーロンダリング対策の法律が施行される

片桐　この5年の間に業界でも様々なことがありましたが、2008年3月1日より、「犯罪による収益の移転防止に関する法律（マネーロンダリング対策）」が施行され、200万円を超える貴金属の現金取引には、お客様の本人確認書類の提示が必要になりました。協会としましては、広報活動を通じて相当早い時期から準備をし、協会加盟各社に周知徹底をしていたわけですが、丁度、法律が施行される時期に金の相場が高くなり、そのピークの時期と重なったのではないかと思います。（2008年3月、1,023.5ドルの高値）

乾副会長

岡本　そうですね。当社の店頭では、最後のお客様がお帰りになったのが夜の12時を過ぎてしまいました。金地金の各小売の店頭に来られた方は、金地金を持って来ておられる、あるいは金を買うための現金を持っておられる、あるいは売った代金を持っておられる…。いずれにしても、大変な資産を身に着けて持っておられる方の安全をどうやって確保するのかを最大限配慮しなければなりません。お帰りになる際の安全ですね。帰りがけに事故でも起きると、マスコミで大きな話題になってしまうなーと。夜11時以降にお帰りになる方にはタクシー券をお配りしてご自宅まで帰っていただきました。それは、夜の電車で何かあったら大変だ、ということです。お客様の安全ということが重要だなーということを再認識した次第です。

山口　当社もお客様からのご売却が多くなり、会議室も使って対応しました。当社は創業300年になりますが、創業以来のことだったようです。

片桐　協会の田中初代会長は、我々地金商は売るだけではないのだ、売ったものは責任を持って買わなければならない、とおっしゃっておられたのを思い出すのですが……。マネーロンダリング対策の本人確認ということは、あまりトラブルはなかったようですね。

古宮　この件につきましては、銀行や証券会社などで既に実施されていましたので、自然な流れとしてお客様には受け止めていただけたように思います。それと前もって協会で広報活動やPR活動を行いましたので、お客様もある程度理解された上で来店されており、その結果大きなトラブルはなかったように聞いています。

山口　何でそういうことをするのか、との問い合わせもあった様ですが、説明をすると皆さん納得していただけたようですね。

乾　マネーロンダリング対策に関して、一応、「厳しくなりましたね」と言われるものの、金が他の商品と違って、金融的一面もあり、「まあ当然のことですね」と言われるお客様もいらっしゃいます。金を扱われるお客様の心情というか、お心は真面目で実直がゆえに、他のものとは違っていて当たり前との感覚があるのではないかと思います。ですから、売買されるお客様は皆様、身分証明書を携帯されて来られます。当初、心配していた混乱もなく現在に至っており、本当に金はありがたい商品だと思います。

LBMA/LPPM国際会議が京都で開催された

片桐　2008年9月末にLBMA（ロンドン地金市場協会）とLPPM（ロンドン プラチナ・パラジューム市場協会）の共同でTheLBMA/LPPM Precious Metals Conference 2008が京都のホテルオークラを主会場として開催されました。協会は、この権威ある国際会議に協賛をしました。2日目の夜のカクテルレセプションは、協会が提供をし、京都の名刹高台寺の庭で開催されました。日本で初めて開催される国際会議で、当協会の存在や社会的な地位を世界にアピールすることが出来たと思っておりますが、地元の乾さんはどのような思いをも

たれましたか。

乾　高台寺というのは大変に有名なお寺で、あそこを借りるということは、単にお金を出したから借りられるというものではないそうです。それにふさわしい条件がないと借りられないと思います。それを協会が、あのような国際的な場に利用させてもらえたのは実にありがたいことでした。当日は残念なことに少し雨だったのですが、木々の緑が雨にうたれ、それが照明に映え、より鮮明になり、大変幻想的で日本的で良かったのではないでしょうか。参加者の皆さんも感激され、喜んでおられました。

片桐　当時の会長であった岡本さんがオープニングのスピーチをされました。日本であのような国際会議が開催され、感慨深いものがおありだったと思います。

岡本　あのカンファレンスは、毎年その時期に最も話題性の高い国で開催されるということで、そのセレクトの中に日本が選ばれたのは光栄なことでした。確かに過去我々が売ってきた金地金の現物の量およびジュエリーは金地金の量に換算すると膨大です。また、実際にこれだけの現物が動いているということは、海外の方にはなかなか信じられない、そのようなことが起きている日本に皆さん集まられたことは、大変な誇りでありました。

山口副会長

古宮　私は、この会議開催の前の週にニューヨークにおりました。その滞在中の9月15日にリーマン・ブラザーズが破綻し、所謂リーマンショックが起こりました。そのために京都会議に出席できなくなってしまった方が多くおられたようです。そのようなこともあり、非常に思い出深い会議なのです。

この5年間、金は勢いを増して史上最高価格を記録

片桐　この5年の金の価格についてお話いただきたいのですが、先ほど岡本さんから2001年までの10数年間は、金をとりまく環境は暗黒の時代だったとお話がありました。それが弱気一辺倒から少しずつ強気に転じてきたのは、1999年9月のワシントン協定で欧米の中央銀行15行が金の売却を5年間で2,000トンに制限すると決めました。この協定により鉱山会社への売りヘッジがやみました。これが起点だったと思いますが。

岡本　鉱山会社は、歯止めがないと価格が下がりすぎてしまい、勘弁してよ！と悲鳴をあげていましたね。

片桐　中央銀行の売りがある程度制限されてから潮目が変わってきたと思うのですが、その後、少しずつ金価格が上昇に転じてきました。それが2003年あたりでしたね。2005・6・7年にはファンドからの資金が金にも流れ込んできました。その過程において金ETFというものが、金の価格に大きな影響をもたらしてきたと思います。その後2008年3月までですが、途中で2006・7年にサブプライム問題が表面化して、所謂紙の資産から現物資産である金の方に資金が移るということになり、ドルに対する信認もゆらぎ、金やプラチナに対して投資資金が入ってきたのです。

岡本　特にペイオフが実施される直前に、銀行からお金をおろされ金を買った方たちは、多分今の半分位の価格だったでしょう。

古宮　ペイオフが解禁された2002年4月の金価格は1,500円以下でしたからね。

岡本　その方たちの中には今、銀行が安定してきたので金を売却されて、また銀行に預けたという方がいらっしゃいますね。

片桐　特徴的なのは、これまでは買い取りというとインゴットが多かったのですが、今は街に〈金・プラチナ買い取り〉の幟が立って、不要なジュエリー買い取りますというのが目につくようになりましたね。

岡本　まさに今、以前に買ったジュエリーを現金化される、そしてそれを実感されている。これは永い将来において貴金属ジュエリーのためになっているのですね。こんなに高くなっているのですか、と皆さん驚かれるのですよ。特にプラチナのジュエリーなんか、こんな金額貰っちゃっていいのですか…って。過去に買われた金地金やコイン、ジュエリーを売却された時のお客様の実感というのは、大変大きなプラスの影響だろうなと思います。それをマーケットとしてつないであげることが大切ですね。

信頼のおける協会加盟会社をもっと一般にPRを

片桐　協会の正会員になるには、精錬の技術を持っていることと、品位分析の技術を持っていることが条件になっています。末端の買い取り業者と消費者との間で買い取り価格についてのトラブルやジュエリーの買い取りに際し真偽のトラブルなどが、たまにあると聞きます。このような問題は、協会会員には鑑定技術がありますから安心してお任せくださいというようなことを一般の方にPRしてもいいのかとも思います。

古宮　お客様からすれば買うときも売るときも、信用できる店なのかどうかということが一番不安に思われる点だと思います。そういう意味では売買は信頼できる協会加盟店で……というPRも必要かもしれませんね。

片桐　最近の動きですが、サブプライム問題以後、金にお金が流れ、金ETFもどんどん膨らんで2008年3月にはピークを迎えました。特にプラチナは2,300ドル台をつけ、すごく高くなり、しばらくは高値安定が続きましたがリーマンショック以後、10月後半には760ドルまで下がったということがありました。金も1,000ドル超えから870ドルまで下げました。特にプラチナの下げ幅が大きかったですね。金もプラチナも徐々に回復し、金は1,000ドルを超え、1,200ドル前後。プラチナも1,500～1,600ドルで落ち着いています。金が高くなっているということがマスコミの話題になれば、一般の方々にも浸透します。金の取引を利用しての詐欺まがいの行為など社会的に見過ごすことが出来ない事件が散発しているようです。

岡本理事

古宮　昨年、振り込め詐欺が我々の業界にも起こりました。協会の情報網を駆使して非常に早く情報が伝達されましたので、各会員、登録店へ注意喚起をすることが出来ました。金という商品の性格上、換金性が良いということでそのような詐欺行為に結びついてしまったのではないかと思います。金の取引が多くなることは我々にとっては良いことではあるのですが、逆に変な形で使われることになれば、落とし穴があり、業界全体のイメージが悪くなる心配もあります。関係官庁とも連絡を密にしていかなければなりません。

金ETFは、現物を扱う我々にとって何なのか

山口　金ETFのことですが、機関投資家の方が金を扱いたいが、金を大量に買い込んでも保管する場所もなければ保険もかけられない。それに対して金ETFという便利なものが出来て機関投資家たちが買っているという話を聞いたのですが、やはりこのような折に便利なものがあるんだなーと思いました。

岡本　金ETFが導入された時に一番懸念されたのは、我々のお客様が金ETFに移られてしまうと今の市場は消えてしまうのではないだろうか。保管しなくて良く、現物の裏づけがある、というところで我々の店頭や特約店さんはどうなってしまうだろう…。結果としてはアメリカもヨーロッパも日本も現物の売買が盛んになっています。アメリカやヨーロッパの造幣局が作る金貨は生産が追いつかないほど売れているということです。金ETFのお陰で金の取扱いが多くなり注目度が高まり、信頼もあがり、メディアへの露出も多くなり、結果として一般の方が金貨とか地金を売り買いする、そんな形になりましたね。

新会長の思いは魅力ある協会にすること

片桐　最後に協会30年の節目にあたり、今後の新たな協会の発展に向けてのひと言を会長からいただけませんか。

片桐広報委員長

古宮　協会設立当時から最近5年間を見ただけでも登録店の数が20社ほど減っています。正会員も1社、賛助会員も6社減っています。もしかしたら協会加盟店であることの魅力が薄れてきているのかもしれません。協会としましては、これから新規会員を増やしていくための努力をしていく必要があると思います。宝飾店では経営者の若返りも進んでいると聞いています。そういった若い世代の方へ向けた情報を積極的に発信することも一つの方法だと思います。また、登録店と正会員との交流が少ないように感じています。

2年に1回の研修会の場しかないのが実情ですが、一人でも多くの方に参加していただける様に研修会の内容や実施時期なども含めて見直すことも必要かもしれません。魅力のある協会にしていきたいと思います。

片桐　会長から今後に向けての問題提起もありました。積極的な活動をしていきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

（2010年7月8日実施）

南アは公共交通網の不足と治安面から車社会。
通勤時間帯のヨハネスブルクに通じる幹線道路は大渋滞

南ア訪問記（南アフリカ視察研修）

知識と見聞を広め、相互交流を深めた9日間

文・写真
亀井 幸一郎
金融・貴金属アナリスト

（社）日本金地金流通協会設立30周年記念の南アフリカ視察研修が2010年3月19日（金）から同27日（土）までの9日間の日程で実施された。岡本英彌会長（当時は会長、現在は理事）以下参加総勢21名がアフリカ大陸、そして南アフリカとその主幹産業である鉱山業の現状を、まさに目で見て肌で感じ、知識を吸収し、相互の交流を深めた9日間だった。

●ヨハネスブルクを窓口にしたネットワーク

南半球に位置する南アフリカは遠い。日本からは、いくつかのルートがあるが、今回は成田から香港を経由してヨハネスブルクへ飛ぶルートだった。行きは乗り継ぎの待ち時間（1時間10分）を含め約19時間を要した。利用した航空会社は、キャセイパシフィック航空。さらに南ア国内でケープタウンへの移動はブリティッシュ・エアウェイズ（英国航空）だった。訪問記の冒頭に何故に利用した航空会社名の紹介から始めるのか？直行便が飛ぶこのルート、そして航空会社の存在自体が南アの過去、そしてこれからを見る材料でもあると思ったからだ。

南アは1652年にオランダの東インド会社がアフリカの南端に街をつくり、欧州とアジアの海運の中継基地（水や食料の補給基地）として利用したのが始まりとされる。その後戦乱を経て1910年に英連邦に加わる。アフリカ大陸諸国はみな同じだが比較的新しい国である。香港から乗り継いだヨハネスブルク行きの飛行機は、週末金曜日ではあったものの満席だった。中国系と思しき乗客が大半を占めていた。そして驚いたのは帰国の香港行きもやはり満席に近かった。サッカーのワールドカップが開催される3ヵ月前の時期である。観光目的なのか何なのか、まず利用客の多さに驚いたのだが、その疑問は南ア到着後に解けた。

南アはアフリカ大陸随一の経済規模を誇る国で名目GDPは2,872億ドル（2010年推計）。全アフリカの3割弱にあたる。最近は投資対象として注目度が上がっているサハラ砂漠以南の47ヵ国を「サブサハラ」と呼ぶが、その中で群を抜いた中心国でもある。人口は5,011万人（2009年）で19世紀後半に金やダイヤモンドが発見され、鉱業を中心に発展してきた。近年では付加価値産業の育成を前面に掲げ工業、金融、サービス業の育成に尽力しており南アGDPに占める鉱業の比率は10%程度に下がっている。日本との関係は、鉱物資源を中心に南アにとって最大の輸出相手国となっている。折しも今年は南アフリカと日本が直接的な交流を開始して100年目にあたる節目の年とのことだった。

そんな南アに現在在住している邦人の数は現地で聞いたところでは1,280人とされる。日本人学校はヨハネスブルクに1校あり生徒数は31名（小1～中3）。対して中国系住民の数は外務省のデータでは40万人とされるが、それ以上という話もあり実数は不明。今から約10年前の2001年には4～5万人規模だったとのこと。多くは3年契約など季節労働者で、不法移民も多いと見られるということだった。アフリカ諸国には中国が資源外交を展開しているのは広く知られている話だが、資金援助にからめ中国製品の輸出を進め、貿易額でも植民地時代の旧宗主国を押えてトップに躍り出ているのが現状のようだ。ヨハネスブルク行きの飛行機の混雑ぶり、また中国系乗客の多さにはそんな背景があったのである。「最大の輸出相手国はニッポン」が今後数年で「チャイナ」になるのかも知れない。実際にショッピング・モールを歩く我々に向けて店員が投げかける挨拶は「ニィーハオ」だったが、こうした現状を知るとむべなるかな、ということになる。

さらにこの延長線上で話を進めるならば、近年海外からの直接投資を促進する政策を南ア政府がとっていることもあり外資の流入も増えている。2007年までのデータによると累積で7,519億ランド（約8兆6,000億円）となっており、全体の7割が旧宗主国の英国からとなっている。かつて南アは法律によりアパルトヘイト（人種隔離）政策を取っていたが、英国を含む世界各国からの非難決議や経済制裁の中でも改めず、結局1961年には英連邦を脱退してまでこの政策を続けた。廃止したのは30年後の1991年のことだった。そして1994年にはすべての人種が参加する総選挙が行われ、ネルソン・マンデラを大統領とする黒人政権が誕生することとなった。

足元で南アへの直接投資がもっとも多いのが英国と知って思ったのは、英連邦脱退やアパルトヘイト廃止、白人政

権の終了という一連の流れのなかでも英国との関係は営々と続いてきたという事実である。思い至ったのは冒頭のヨハネスブルクへの直行便運航会社だった。なるほど「香港⇔ヨハネスブルク（キャセイパシフィック航空）」、「ロンドン⇔ヨハネスブルク（英国航空）」さらには「シンガポール⇔ヨハネスブルク（シンガポール航空）」を加えると、かつての英連邦を結ぶネットワークが浮かび上がる。ロンドンを起点にこれらは、すべて結ばれているわけだ。直行便の存在は、すなわち人の交流のインフラの存在を意味し、いわば"ユニオンジャック・ネットワーク"の存在を意味する。かつての「日の沈まぬ帝国」の利権は今でも息づいているわけだ。そこに相乗りするかたちで中国の南アひいてはアフリカ大陸への進出が続いており、南アにおける中国系住民の急増に表れているということだろう。南アは金やプラチナはいうに及ばずクロムやバナジウムなど重要度が増しているレアメタル（希少金属）の豊富な埋蔵量でも知られる国でもある。その争奪戦に加わった中国の南アへの影響力の広がりをまずは考えたのだった。

●地下1,000メートル、プラチナ採掘の現場

今回の南ア訪問の中心テーマは、我々が日々取り扱っている貴金属の生産現場の視察と同国鉱山業界が置かれている現状を知ることだった。なかでも現場の視察は、訪問目的の中心に座るものでまさに百聞は一見にしかず、鉱石の採掘現場から精錬工程のプラントを川上から川下まで時間を掛けてくまなく回る機会を得たのは、得難い体験だった。ここでは採掘現場の視察にスポットを当ててみよう。

訪れたのはヨハネスブルクから高速道路を北西に2時間ほど走ったルステンブルグにあるプラチナ鉱山会社アングロ・プラチナム社だった。世界全体のプラチナ生産188トン（2009年）の76%を占める南アにあって、同社は1社でその半分を占めるまさに世界最大のプラチナ生産会社である。2日間にわたり早朝7時に宿泊先のホテルを出て同社に赴き、社内での朝食に始まり同社の歴史や鉱区、設備についてのプレゼンテーションや現場視察、さらに昼食を挟み視察やプレゼンテーションと夕刻までスケジュールは満杯という状態だった。鉱山の現場部門、精錬部門、さらに製品管理とプレゼンテーションも詳細に及び、丁寧かつフレンドリーな対応に好感度も上昇、まさに研修会の色合いの濃い視察となった。

さて、採掘現場の視察だが、まず南アの鉱山と聞いて何を連想するだろうか？ おそらく「鉱山」という日本語表記から山中に分け入った所というイメージが強いのではないだろうか。我々が訪れたアングロ・プラチナム社のルステンブルグの鉱区は、サバンナに切り開かれた平坦な道路を車で走っていると遠くに貯鉱用のサイロに大型のベルトコンベア、掘り出され山積みされた鉱石が現れ、そこが採掘現場いわゆる「鉱山」だった（写真1）。一行が入坑したのは、バソペレ鉱山（Bathopele Mine）で「UG 2」という比較的新しい鉱脈の採掘を行っているところ。採掘現場に入るにあたりまず安全管理についてのブリーフィングを受けた後に4班に分かれ準備にとりかかる。

まずは着替え。厚手の綿製の作業服に同じくソックス、同じく綿製の手袋。これは表面に合成ゴムの滑り止めがついているが左右で赤と緑で色が異なる。坑内での手信号用にも使える代物。さらにヘッドランプ装着のヘルメットと腰につけるバッテリーや緊急用酸素マスクその他。履くのは爪先を保護した安全靴、さらにゴーグルに耳栓。身につけて感じたのは、その重さ。この装備で地下深くに潜り、数時間にわたり作業することを考えると、その大変さを改めて実感。入坑のための個別のチエックが口頭とヘルメットについているセンサー様のものがゲートで自動認識されるシステムとの併用で行われていた。どの鉱山でも現場への入出の管理を厳重に行っているが、自動認識装置は初めてだった。

いよいよ現場に入るのだが、バソペレ鉱山は立抗ではなく斜抗となっているため、低床式の移動車両を使うことになる（写真2・3）。頑丈なスチール製の金網で覆われたディーゼル車でエンジン音がすごい。装甲車のイメージである。

写真1：サバンナを切り開いた道路沿いに現れる「鉱山」

写真2：現場への移動用車両。低床式で頑丈な金網で保護されている

車両には膝を抱えて身を小さくして乗るのだが、窮屈であるのは否めない。欧米系で体格のいい人はさぞ大変だろうと思った次第。車は轟音をたて中に入っていく、狭い坑道ゆえに出てくる車両との事故を防ぐために要所では、けたたましい警笛を鳴らしながら進む。簡単に整地はされているが凹凸のある作業道だけに、ガタガタ揺れるたびにヘルメットが車両の天井にゴツゴツと当たり、思わず首をすくめることの連続。こうして20分ほどで地下1,000メートルの現場に到着。まずはそこで全員で現場の責任者の鉱山技師から、鉱区の状況や掘削の方法、安全上の注意点についてブリーフィング。現場はいかに事故を防ぎながら目標とした採掘量を達成するかということで、チーム制で競う形となっていた。ちょうどワールドカップの開催を控えていたこともあり、チームには「チーム・ジャパン」のように出場国の名前を付けているとのことだった。余談だが、ルステンブルグにはワールドカップの会場となった「ロイヤル・バフォケン・スタジアム」があり、日本がデンマークと戦った場所でもある。TV中継の折に日本応援団の中に現地の人と思しき姿を見たのだが、もしやアングロ・プラチナムの「チーム・ジャパン」の鉱山労働者ではないかと思ったりした。ちなみに「バフォケン」とはルステンブルグ地域に先祖代々住まうバフォケン族にちなんで付けられた名前ときいた。

ブリーフィングの後は、再び班ごとに分かれ、それぞれ現場の鉱山技師が説明役としてついてくれ歩いて坑内の現場視察に向かった。坑内は高さ約1メートル80センチほどだが、ところどころ低いところがあり、屈みながら移動する。さほど暑さは感じなかったが、やや湿度が高い感じ。石が転がっており足元は悪い。無意識に緊張していることもあり、歩き始めてすぐに汗をかき始める。天井からの落石を防ぐために、落ちそうな部分は敢えて事前に手作業で落とす現場を見たが、確かにひとつ間違えば事故につながる作業である（写真4）。興味深かったのは、落盤を防ぐために大型の瞬間接着剤を使っていたことだった。天井部分に事前にドリルで穴を空け、そこにA剤、B剤と連なった筒状のものを差し込み、そこにボルトを差し込みA、Bの袋を突き破り混ぜ合わせて接着するというものだった。

進むうちに岩肌に白のスプレーペイントで印をつけ「REEF」と表示されたものが現れる。その白線は坑道にそって走っている。まさにそこがプラチナの鉱脈の在り処を示すもので、平均して73センチメートルということだった。その線の伸びる方向に何十キロメートルも掘り進んでいるのが南ア鉱山の実態といえる。ちなみにこれは金鉱脈でも同じで、幅の比較的狭い層が延々と続いているのが南アの鉱脈の特徴となっている（写真5）。

採掘はこの鉱脈を発破で砕き、その鉱石は枝分かれしたベルトコンベアで幹にあたる大型コンベアに送り、その上で地上に運ぶという方法を取っていた。発破用の穴をあけたり、砕いた鉱石の運搬には、各種鉱山機械や低床式のブルドーザーが使われていた。鉱山業は労働集約型の産業だがコスト削減もあり機械化が進んでいる。作業が止まっている現場にも出くわしたが、機械が故障して何人かで修理をしているところだった。こうした環境のなかで掘り出す鉱石1トンの中に含まれるプラチナは約3.1グラム（1オンス）。精錬設備の能力に合わせ月間45万トンの採掘が目標とのことだった。

南ア鉱山では、黒人政権誕生後の急激な黒人優遇策の拡大のなかで南アを脱出する白人が増え、鉱山業界でも頭脳流出が深刻化し問題となった。熟練の鉱山技師の海外流出が生産活動に影響を及ぼすということが見られたのである。この問題は今も尾を引いており、各鉱山とも労働者のスキルを高める様々な教育活動にも取り組んでいるようだ。今回、我々を坑内に誘導してくれた白人技師に聞いたところ12年前にポーランドから移住してきたということだった。ポーランドでは炭鉱に勤務しており、南アに来て収入が上がったとのことだった。

ところで、アングロ・プラチナム社の位置するルステンブルグ一帯は、先にあげたようにバフォケン族の居住地とされるが、同社の精錬所や最終仕上げ工程のプラント内では地域のスポーツ大会やその他催し物の案内が掲示されて

写真3：移動車両から見た坑道入口。右手にメインのコンベアが見える

写真4：坑道の落石を防ぐため予め落ちそうなところは事前に落としてしまう

いるのを目にした。また同社の敷地内には、スポーツ競技用と目されるフィールドが点在しているのも見かけた。そこからは地域一体型の企業運営という方針を読みとったのだが、見方を変えれば発言力の増す黒人地域社会に対し、企業経営がどう折り合って行くのかを模索しながらの展開という理解もできよう。このことは、次に訪れた南アフリカ鉱山会議所で受けたプレゼンテーションの内容から、鉱区の先住部族との間で採掘権料の支払いが近年生じていることが判明した。

●南アフリカ鉱山会議所の訪問

―様々なコスト上昇と戦う鉱山業界―

南ア鉱山会議所（Chamber of Mines of South Africa）は、同国鉱山業界の元締めともいえる団体で、今以上に鉱山業が南アの基幹産業たる地位を占めていた際には、政治経済の両面で絶大な力を有していたところでもある。業界の利益団体として発展のために政府へのロビー活動を行うとともに、業界内にあっては調査広報活動や経営上のアドバイスなどを行ってきた。歴史は古く南アで大規模金鉱床が発見された３年後の1889年の設立となっている。ヨハネスブルクの旧市街地メーン街にあり、かつては大手鉱山の本社が軒を連ねヨハネスブルクの中心地とされた場所でもある。現在の市街地は新都心ともいえるサントン地区近辺に移っている（写真６）。

南ア鉱山会議所では、チーフ・エコノミストや法務関係者により金を中心としたプレゼンテーションを受けたが、南ア鉱山業界の置かれている現状が浮き彫りとなった。

100年以上にわたり金の生産では圧倒的なトップを走り続けて来た南アだが、近年急激に生産量が落ちている。2007年にはトップの座を中国に明け渡し、2009年には219トンと首位の中国に水を空けられオーストラリア（222トン）に次いで３位に位置している。ちなみに４位は１トン未満の差で米国となっている。会議所の説明では、それでも南アの輸出の８％を金が占めているとのことだった。ただし生産の減少はこの先も続く見通しで15年には140～150トンを予想していた。

こうした急激な落ち込みの背景にあるのは、生産コストの急激な上昇となっている。まず長年の採掘により現場の条件が悪くなっている。現場が深くなり金鉱山の平均で2,700メートルとのこと。もっとも深いところはアングロ・ゴールド・アシャンティ社（世界第３位の生産規模）の鉱区で3,900メートルに達している。地熱については55℃と、一般に伝えられているより高いデータが提示されたので驚いた。それを労働に適した環境にする冷却技術は世界最高のものとしていた。電力使用の50％がこの冷却用に用いられるとのことだった。いうまでもなく電力インフラが鉱山会社にとってのライフラインのひとつということになる。

その電力料金がここにきて急ピッチで値上がりしている。老朽化した設備の更新を目的にした電力料金の引き上げが続いており、2009年７月には31.3％に続き2010年は24.5％上がった。計画では2011年に25.8％、2012年に25.9％引き上げられる予定という。この値上げ率も鉱山会議所の働きかけで予定より下がったものとされていた。

さらに今回入手した鉱山会議所のデータで興味深かったのは、電力料金以外にもあらゆる方面で鉱山のコストアップ要因があることだった。2008年から2009年に上昇したコストは、掘削現場で使用する鋼材（24.4％）、セメント（12.7％）、坑道の梁など補強用鋼材（12.5％）、掘削関連機器（8.5％）など広範囲にわたっていた。考えてみれば、これらの素材、材料は南アを含む新興国需要の高まりが値上がりをもたらした側面が強い。成長がそのまま自らの素材産業のコストアップに跳ね返っているわけだ。

以上３点にまとめてみたが、この他にも南ア国内の移動中に見た風景など、日本国内の視点では考えられないような体験も多くした研修だった。さらに実り多かったのは、こうした視察もさることながら、参加者相互の懇親という機会も得難いもので今後のネットワークの醸成にも大いに意義のある研修となった。

写真5：鉱脈に付けられた印。UG２の場合平均約73センチの幅になっている

写真6：南ア鉱山会議所は、いわば南ア鉱山業界の総本山